

芹生谷遺跡Ⅱ

大阪府教育委員会

芹生谷遺跡Ⅱ

大阪府教育委員会

序 文

昭和 43 年 1 月 15 日、河南町役場発行の『河南町誌』第一章「ひらけゆく郷土」の中に、次のような記載があります。「河南町にちかい藤井寺市の国府や、富田林市の喜志・錦織などで石器や土器がたくさん採取せられたが、そこからわずか数キロの近い所にあるわが河南町でも寛弘寺、芹生谷、白木で石器や土器を幾つも採取している。」

この文章の「・・・寛弘寺、芹生谷、白木で石器や土器を幾つも採取・・・」の「石器や土器」は、前後関係から弥生時代の石器や土器を指しています。芹生谷遺跡の発掘調査では、弥生土器は出土していませんが、サヌカイト片はたくさん見つかっていますので、この文章の石器が二上山で産出する打製石器の原材料であるサヌカイトのことと考えられます。

芹生谷遺跡は平成 19 年度に実施した試掘調査によって、新たに発見されて周知の遺跡になったわけですから、『河南町誌』が刊行されてから約 40 年の年月が過ぎて、やっと日の目を見たことになります。そして、40 年前に芹生谷の地でサヌカイト片を採取して、遺跡の存在を示唆した先人は卓見といわざるを得ません。芹生谷遺跡の発掘調査はまだまだ始まったばかりです。今後の調査の進展に伴って、どのような成果があがるか期待したいとおもいます。

調査の実施にあたり、ご協力をいただいた地元の皆様をはじめ、河南町教育委員会、千早赤阪村教育委員会、大阪府富田林土木事務所ほか、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 野口 雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府都市整備部から依頼を受けて、本府教育委員会が実施した一般国道 309 号（河南赤阪バイパス）道路整備工事に伴う、大阪府南河内郡河南町中、芹生谷、同郡千早赤阪村川野辺所在の芹生谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地発掘調査は、平成 22 年度に本府教育委員会文化財保護課調査第二グループ主査橋本高明を担当者として実施した。
遺物整理は、平成 23 年度に橋本、本課調査管理グループ主査三宅正浩、副主査藤田道子を担当者として実施した。
3. 本調査の調査番号は、10050 である。
4. 本調査における写真測量は、株式会社八州に委託した。撮影フィルムは同社が保管している。
5. 本書に掲載した出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 調査で作成した記録は、本府教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆、編集は橋本が行った。
8. 調査にあたっては、河南町教育委員会、千早赤阪村教育委員会の協力を得た。
9. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。
10. 本書は 300 部作成し、一部当たりの印刷単価は、420 円である。

目 次

序 文	i
例 言	iii
目 次	iv

本文目次

挿図目次

図版目次

本 文 目 次

I. 調査に至る経過	1
1. 遺跡の発見		
2. 既往の調査		
II. 位置と環境	2
1. 芹生谷遺跡の位置と微地形		
2. 歴史的環境		
III. 調査成果	5
1. 調査の概要		
2. 基本層序と遺構		
3. 出土遺物		
IV. まとめ	11
報告書抄録	12

挿 図 目 次

第1図 芹生谷遺跡範囲図	1
第2図 芹生谷遺跡位置図	2
第3図 周辺の環境図	4
第4図 調査区位置図	5
第5図 Aトレンチ土層図	6
第6図 Aトレンチ平面図	7
第7図 Bトレンチ土層図	8
第8図 Bトレンチ平面図	9

図 版 目 次

図版1 環境	
図版2 Aトレンチ全景	
図版3 Bトレンチ全景	
図版4 土層	
図版5 焼土坑	
図版6 発掘体験	
図版7 出土遺物 1	
図版8 出土遺物 2	
図版9 出土遺物 3	
図版10 出土遺物 4	

I. 調査に至る経過

1. 遺跡の発見（第1図）

平成 18 年度に大阪府都市整備部富田林土木事務所は、一般国道 309 号（河南赤阪バイパス）整備工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、本府教育委員会文化財保護課に協議を行った。

道路整備工事は、南河内郡大字中から同郡千早赤阪村大字川野辺にかけての南北約 700 m、幅員 21 m を新設する計画であった。道路建設予定地は、この時点では埋蔵文化財包蔵地外であったが、道路建設予定地に隣接して古墳時代後期の双円墳で国史跡にも指定されている金山古墳がみられることや、周辺の河南台地一帯には南北方向の条里制区画が広がること、あるいはその水田に供給される農業用水の水源地にも近いことなど、古墳時代後期以降中世にかけての新たな埋蔵文化財包蔵地が発見されることも十分予測し得る環境であった。

協議の結果、次年度（平成 19 年度）に道路建設予定地内の試掘調査を実施して、埋蔵文化財の有無等を把握することとなった。

試掘調査の結果、道路建設予定地内のほぼ全域にわたって須恵器、土師器、瓦器などの遺物を含む遺物包含層を確認した。また、部分的にではあるが柱穴、土坑、溝などの遺構も検出した。これらの試掘結果をもとに、地元の河南町教育委員会、千早赤阪村教育委員会と協議したところ、道路建設予定地及びその周辺に新たな埋蔵文化財包蔵地が発見されたことを確認した。新規発見の遺跡は「芹生谷（せるたに）遺跡」と命名され、周知されることとなった。

2. 既往の調査

試掘調査の結果、道路建設予定地全体が芹生谷遺跡の範囲に含まれることとなったため、道路建設の事前に発掘調査を実施することが必要となった。当初は、平成 20 年度より道路予定地全体の発掘調査を実施する予定で準備を進めていたが、財政再建プログラムにおいて一時休止路線となつたため、本格的な発掘調査はできなくなつた。

したがつて、平成 20 年度は道路建設予定地北側の擁壁および水路の設置に伴う発掘調査を実施することとなった。幅 2 m、延長約 300 m の南北に細長い調査区である。調査区の現況は北に向かって下降する段々畑で、北端で標高約 118 m、南端で約 125 m、比高差 7 m である。出土遺物は、サスカイト片、古墳時代時代後期の須恵器、鎌倉時代の土師器、瓦器が多く、若干の白磁、青磁が出土している。遺構はピット、土坑、溝を検出しているが、調査区が狭小なため広がりや性



第1図 芹生谷遺跡範囲図

格などは不明である。

平成 21 年度は南側の擁壁および水路の設置に伴う発掘調査を実施した。調査区は、金山古墳より南側で金山古墳と谷を挟んで対岸の丘陵上になる。幅 3 ~ 7 m、延長約 300 m の南北に細長い調査区である。調査区の現況は北に向かって下降する段々畑の東側の縁辺で、北端で標高約 180 m である。出土遺物をみると、大半は鎌倉時代以降の遺物であるが、サヌカイト製の石槍が 1 点出土したほか、高台を付した須恵器の杯や黒色土器もみられる。金山古墳側の丘陵部よりやや古い時期のものがある。

II. 位置と環境

1. 芹生谷遺跡の位置と微地形（第 2 図；図版 1）

芹生谷遺跡は大阪府南河内郡河南町中、芹生谷および同郡千早赤阪村川野辺に所在する。南北に大きく広がる河南台地の最も奥地に位置する。

国史跡金山古墳の位置する東側の丘陵は、金山古墳付近では標高 132 m を測り、北に向かって緩やかに下降する。遺跡の北端付近では標高 118 m 程度である。金山古墳の西側には谷を挟んで南北方向にのびる別の丘陵がみられる。標高は 140 m と金山古墳の位置する丘陵より若干高い。金山古墳の北丘高が 6.8 m、南丘高が 9.4 m であるから金山古墳の墳頂部の高さとほぼ同じくらいである。

これらの丘陵に挟まれた谷が「芹生谷」とよばれている。金山古墳の西側付近で谷底の高さは標高 127 m を測る。谷の中央付近を流れる水路は、「大島水路」とよばれ、水量は極めて豊富である。大島水路は、その水源を千早赤阪村水分所在の建水分神社付近で水越川から取水し、河南台地を潤す基幹水路となっている。その北端は、天満川となって梅川に合流する。また、今日の行政界としては、概ね「大島水路」流れる芹生谷を境として、西側が川野辺（千早赤阪村）、東側が芹生谷（河南町）となっている。

したがって、芹生谷遺跡は金山古墳の位置する河南町側の丘陵地



第 2 図 芹生谷遺跡位置図

と西の対岸の千早赤阪村側の丘陵地の東縁と両丘陵に挟まれた芹生谷の3か所の異なった地形にまたがって立地する。それぞれの地域の単独の歴史、あるいは有機的に結合した歴史的変遷を明らかにしなければならない。

2. 歴史的環境（第3図）

歴史的な環境としては、既往の調査をみてもサヌカイト片がかなり出土しており、平成22年度の調査で石槍が1点出土していることから、芹生谷遺跡は縄文時代に縄文人の生活空間に含まれていたことは間違いないようである。

芹生谷遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、芹生谷遺跡の北北西約1.5kmの河南町神山に所在する神山遺跡がある。遺跡は、標高87～92mの段丘面及び扇状地上に立地し、遺跡範囲は東西500m、南北650mで、縄文時代の集落遺跡であることが判明している。昭和62年、大阪府教育委員会は、農免農道建設に伴う発掘調査を実施した。幅6～7mの河道内から出土し、縄文時代早期の楕円押型文土器のほか、前期・後期の土器・石器が出土した。南河内地域における縄文時代遺跡の中でも、古い時期に属する遺跡である。神山遺跡と芹生谷遺跡の関連性については、今後の調査の進展を待ちたい。

今のところ、芹生谷遺跡では弥生時代から古墳時代中期にかけての土器は検出していない。付近にも古墳時代前期・中期に属する古墳は認められない。金山古墳が築造される6世紀後半頃になると、金山古墳の西約400mに千早赤阪村水分所在の御旅所古墳、御旅所北古墳があらわれる。御旅所北古墳では、金山古墳北丘と同様主体部を横穴式石室とし、家形石棺を2基納めている。ただ金山古墳北丘は刳抜式の石棺であるが、御旅所北古墳は組合せ式の石棺である。しかし河南台地の最奥部で、古墳時代の最終段階の同じような時に、似たような主体部を持ち、2基の古墳が近接して築造されることなど、両者には共通点の多く大変興味深い。

次に、河南台地一帯に現在もみられる南北方向の条里区画の起源の問題である。文献史学的にも、地理学的にも、さらに考古学的にも、かつてよりこの問題についてアプローチがなされている。条里区画の起源の問題、条里区画の広がりの問題、水利の問題などである。今後、これらの問題を解くべき新たなデータとしては、発掘調査による考古学的なデータの蓄積が求められるであろう。芹生谷遺跡の発掘調査に期待したいところである。

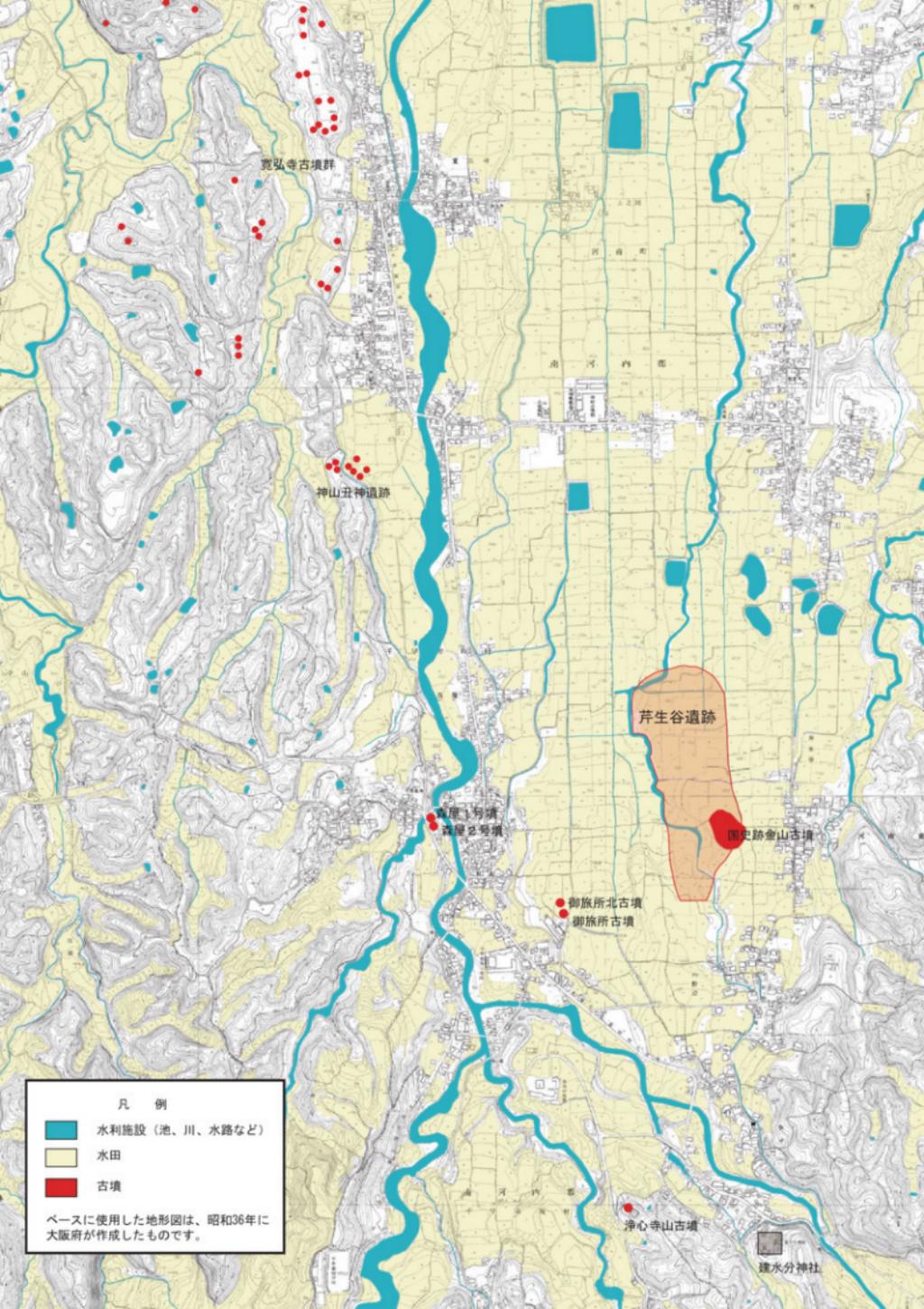
【参考図書】

大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-9『芹生谷遺跡』大阪府教育委員会

『河南町誌』昭和43年 河南町役場

大阪狭山市文化財紀要『さやま誌』第2号「石川流域における灌漑施設の復元的考察に関する

覚え書き」山田幸弘 大阪狭山市教育委員会 1993.3



III. 調査成果

1. 調査の概要（第4図：図版表紙、図版6）

今回の調査地は、金山古墳と同一丘陵上で古墳の北西約100mの地点に設定した。元来はなだらかに北西に下る丘陵を、現況ではひな壇状に造成された田畠である。二枚の田畠にそれぞれ調査トレンチを設定し、北側の低い位置（標高約129m）にAトレンチ、南側はBトレンチ（標高130m）である。調査面積は、Aトレンチが176m²、Bトレンチが144m²の合計320m²である。

調査の方法は、上層の現代の耕作土を重機で除去したのち、遺物包含層を人力で掘削した。遺構は地山面（明赤褐色粘質土層）の上面で検出した。なお、今回の調査で用いた標高は、すべてT.P.（東京湾平均海面）値である。

また今回の調査の途中において、地元の小学生（高学年）、中学生から一般の方々を対象に、体験発掘を企画したところ、のべ300人を超える参加があった。竹べら、スプーン、移植ごてなどの小型の発掘用具を用いて、Bトレンチ北半の第4層暗灰黄色粘性砂質土層とその下層の第5層暗灰色粘質土層を掘削した。掘削した土量は全員で約3m³であるが、小型の発掘用具で丁寧に作業をすすめたために、1cm画程度の小さな遺物まで採取することができた。

2. 基本層序と遺構（第5～8図：図版2～5）

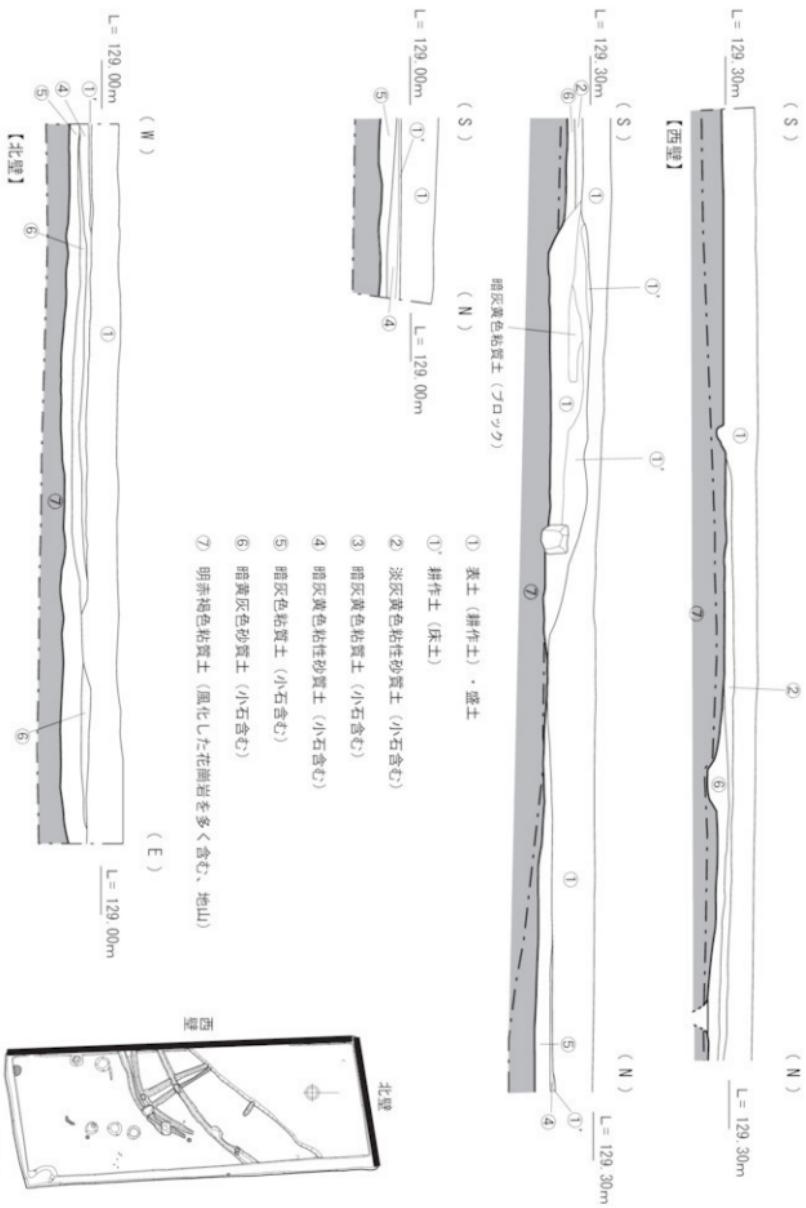
Aトレンチでは、地山面はトレンチの南端から北へ10m付近までは平坦面が続き、それより北に向かっては下降する。Bトレンチも同様で、トレンチ南端から10m程度は平坦面が続き、それより北に向かって緩やかに下降する。両トレンチとともに南側の地山面は平坦で、遺構もなく、地山内に多く含まれる花崗岩が露出する。トレンチの北側では、現代の耕作土の直下から地山までの間に、北端で20～40cmの土層の堆積が認められる。これは地形の高い南側を削り、低い北側に積み上げて耕作地としての平坦面を拡大したものである。

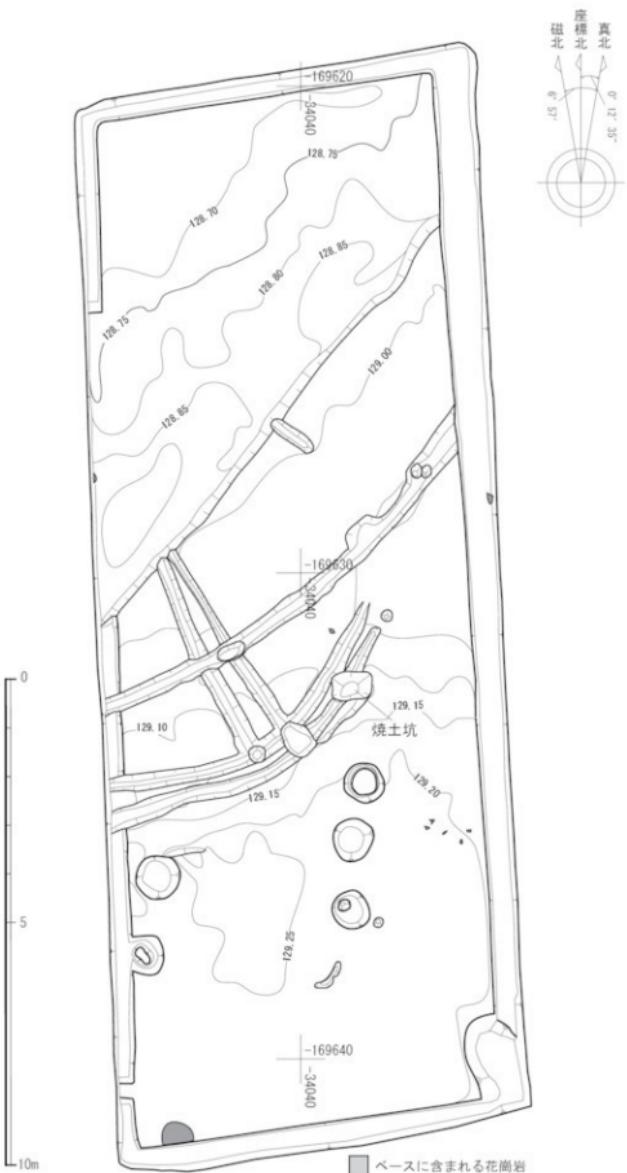
トレンチの北側に見られる第2～6層はいずれも灰白色の小礫を多く含むことから、地山（第7層明赤褐色粘質土）を開墾した際に、地山に含まれる花崗岩が混じったと考えられる。どの層位にもサヌカイト、須恵器、中世の土師器、瓦器の小片が含まれることから、いずれも中世以降の耕作土層と考えられる。

遺構は、溝と土坑がある。すべて地山面で検出された。Aトレンチの溝は、やや円弧を描く東西方向のもので、旧地形の等高線の方向に平行していると考えられる。Bトレンチ

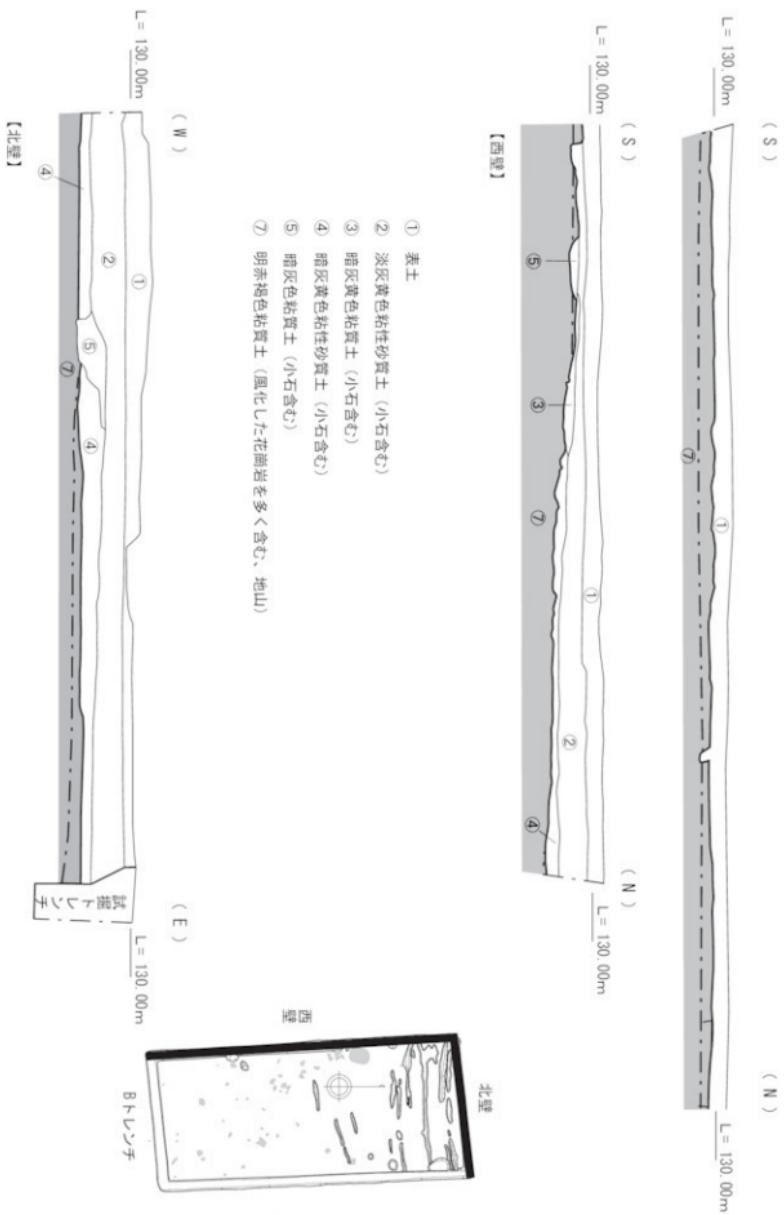


第4図 調査区位置図

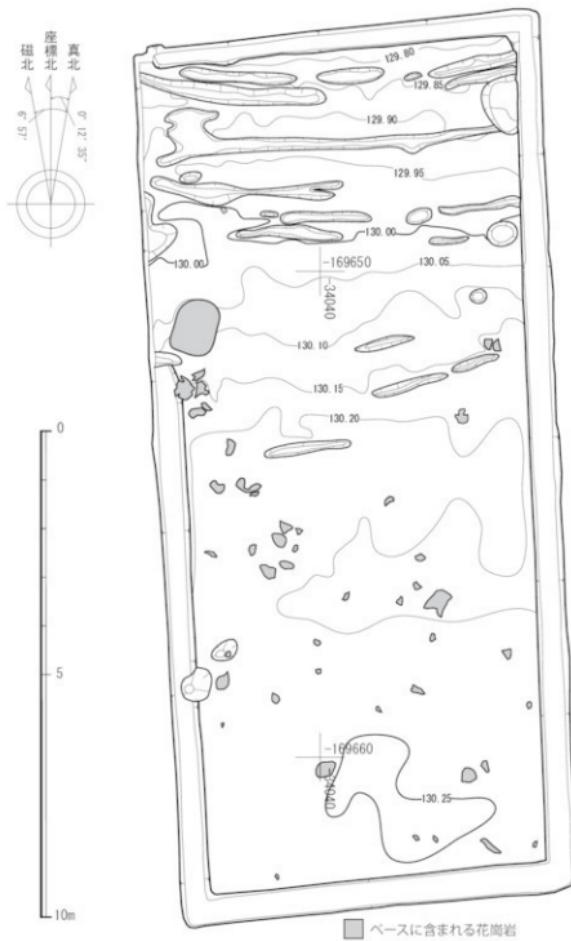




第6図 A トレンチ平面図 (1/100)



第7図 Bトレンチ土層図 (1/50)



第8図 Bトレンチ平面図 (1/100)

の溝も東西方向であるが、直線的である。いざれも鋤溝の類であろう。遺物は出土しなかった。

土坑はAトレーナーの中央よりやや南に隅丸長方形の平面プランをもつ土坑がある。西、北、東の三方の壁が焼けていて赤く変色している。南壁と底は焼けていない。東西85cm、南北50cm、深さ15cmで埋土は暗灰褐色粘性砂質土（焼土混じる）である。遺物は出土しなかった。溝に切られて検出したので、耕作地化される以前の遺構の可能性があるが、性格は不明である。

3. 出土遺物（図版7～10）

今回の調査で出土した遺物は、すべて遺物包含層出土のものである。小片ばかりで図化しうるもののは、ほとんどない。以下、古い時代に属するものから順に述べることにする。

1～14はサスカイト片である。かなり多量に出土しているが、製品は認められない。縄文土器や弥生土器も全く出土していないので、どちらの時代に属するものかは決め難い。ただ平成21年度の調査において石槍が1点出土していることから、現時点では縄文時代に属するものと考えたい。

15～26は須恵器である。15は甕の口縁部、16～21、23、24は甕の体部である。外面はタタキ、内面は16がすり消している他は青海波文を残す。22は壺の体部、25、26も壺体部であるが、底部に近い部分と思われる。

27～41は土師器である。すべて中世に属するもので、27～29、33～35は皿の口縁部、27～29は口縁部か体部にかけて丸みをもつもので、椀の可能性もある。33～35は口縁部から屈曲して底部になり、器高は浅い。30、32は皿か椀の体部である。31、36は皿の底部である。37は甕の口縁部である。38、39は羽釜の体部、40、41は羽釜の鐸部である。羽釜の胎土は砂粒が多く含まれざらついた感がある。

42～48は瓦器、瓦質土器である。42、44は瓦器椀の口縁部、47、48は瓦器椀の高台の付く底部である。43、45は瓦器皿である。46は瓦質土器の羽釜の口縁部である。

49、50は中国製輸入磁器である。49はやや黄色味をおびた灰白色の釉薬のかかる白磁である。口縁部は玉縁状に肥厚する。50はうすい緑黄色の釉薬がかかる青磁である。外面には連弁文がみられる。

51～53は陶器である。51、52は東播系の捏鉢の口縁部である。53は十瓶焼の甕の体部である。外面には、格子状のタタキが残る。内面には緑灰色の自然釉がかかる。

54は鉄釘である。長さ2.3cmと小さく、釘の断面と頭は四角形を呈する。

IV. まとめ

今回の調査では、遺構にはあまり目立ったものではなく、遺構内からの出土遺物もないので遺構の時期も特定できない状況である。したがって出土遺物から、遺跡の性格を分析することにする。

先にも述べたように、もっとも古い時期の遺物としては、サヌカイト片であろう。縄文土器や弥生土器は出土していないが、前回の調査においてサヌカイト製の石槍が出土していることから、出土したサヌカイト片は、縄文時代に属する時期のものではないかと想定した。北北西約 1.5km に位置する神山遺跡との関連性についても十分考慮しなければいけない。逆に、芹生谷遺跡付近が地形的に縄文人にメリットのある空間であるとすれば、弥生時代、古墳時代の農耕社会の中で、生産の場としての土地利用にはあまり魅力がなかったのかもしれない。

次に見られるのは、須恵器である。小片ばかりであるが、6世紀後半代の金山古墳の築造の時期にあたるものである。この時期より、古いものも新しいものも含まれないと思われる。6世紀後半代に須恵器に限定されるとすれば、金山古墳築造に際してかなり活発な人間活動があつたことを示唆している。また平成 20 年度の調査では、須恵器の器台片が出土しているので、金山古墳以外にも古墳が存在した可能性も捨てきれない。

次に中世の遺物であるが、出土した土師器、瓦器、陶磁器は 13 ~ 14 世紀代のものであろう。おそらくこの時期に、芹生谷周辺の水田開発が始まり、人々はこの地に定着して集落を形成したと考えられる。それ以降現代に至って、連綿と水稻耕作は続けられたと思われるが、出土遺物の中に中世後期以降のものが混じらないという現象がある。おそらく 13 ~ 14 世紀頃の芹生谷遺跡周辺の景観としては、2 ~ 3 棟の建物からなる居住区(屋敷地)があつてその周間に水田が広がり、居住区と水田が互いに密着していたと考えられる。これに対して、中世後期以降は集村化が進み、水田域と居住区域が完全に分離し、現在見られるような集落景観になったと考えられる。水田域と居住区が完全に分離したことで、水田耕作土に遺物が混入しにくくなつたのである。出土遺物の中にごくわずかであるが、宋の時代の中国製輸入磁器の細片がみられる。鉄釘とともに、墓地に伴う遺物の可能性がある。中世後期以降、屋敷地の一角にあった墓地も水田化されたのであろう。

最後になったが、調査中に実施した発掘体験の成果について述べる。発掘体験では、300 人を超える参加者で約 3 m³を掘削した。そして竹べらなどの小型の道具で丁寧に掘削したために、遺物包含層に含まれる遺物のほとんど全てを採取したと考えられる。発掘体験での掘削土量は、今回の調査全体の人力掘削土量の 5 %にも満たない量であるが、サンプル調査としては十分な量である。包含層内からほぼ 100% の遺物を選別することができれば、今回の調査のように、調査範囲も小さく、遺構も少なく、遺構内からの出土遺物も認められず、時期が限定された遺物包含層もない場合でも、出土遺物を分析することでかなり精度の高い遺跡のイメージ作りや遺跡の性格を把握することができるし、今後の調査の方向を探ることも可能であるといえる。

報告書抄録

ふりがな 書名	せるたにいせきに 芹生谷遺跡II
副書名	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2011-6
編著者名	橋本高明
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351(代)
発行年月日	2012年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (m ²)	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
せるたにいせき 芹生谷遺跡	おおさかみみなかわちぐん 大阪府南河内郡 かなんちょうせるたに 河南町芹生谷	27219	35	34° 29' 00"	135° 25' 54"	2010.11.01 ～ 2010.12.16	320	記録 保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芹生谷遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 中世	土坑、溝	サヌカイト 須恵器 磁器、瓦質土器、 瓦器、土師器、陶器	国史跡金山古墳の 立地する丘陵上を 調査。古墳築造時(6 世紀後半)の須恵器 片出土。

要約	芹生谷遺跡は、河南台地の最奥部に位置する遺跡である。今回の調査で出土した遺物を古い順にみると、サヌカイト片、古墳時代後期の須恵器、中世の土師器、瓦器、陶器である。サヌカイトは、前回の調査でも石槍が出土しているので、縄文時代に属するものと思われる。須恵器は、金山古墳の築造ごろのもので、古墳の築造に伴って人間活動が活発になったことをあらわしている。中世の土器は、13世紀代のものと考えられる。河南台地一帯に広がる南北方向の条里区画がどの時期に成立したかは、今後の課題であるが、芹生谷遺跡の今回の調査地周辺では13世紀代には集落は成立していたと考えられる。
----	--

図版

Aトレーンチ

Bトレーンチ

調査地全景垂直写真



Bトレンチから国史跡金山古墳、金剛山を望む（南東方向）

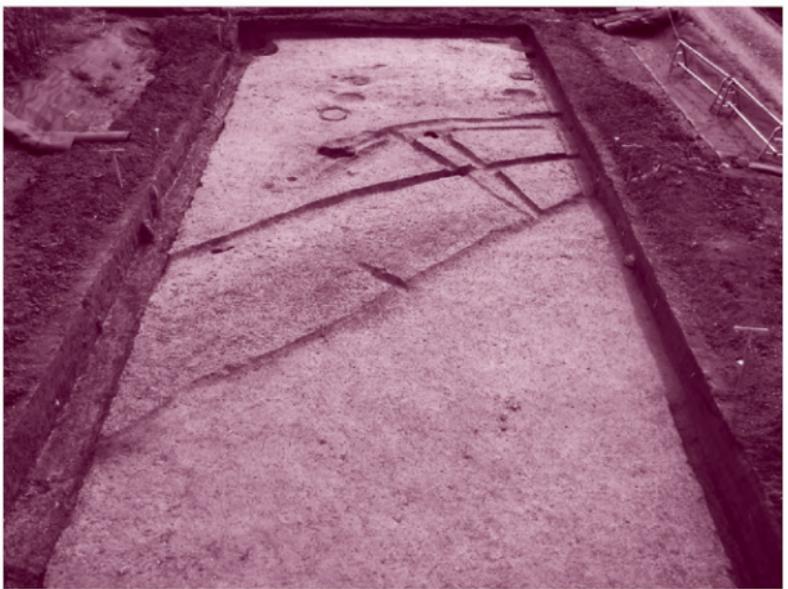


調査地から羽曳野丘陵を望む（北西方向）

図版二 Aトレンチ全景



南西から



北から

図版三 Bトレンチ全景



北西から



南から



中央付近



A トレンチ西壁
南端から北壁



中央付近



B トレンチ西壁
南端から北壁

圖版五 燒土坑



検出状況



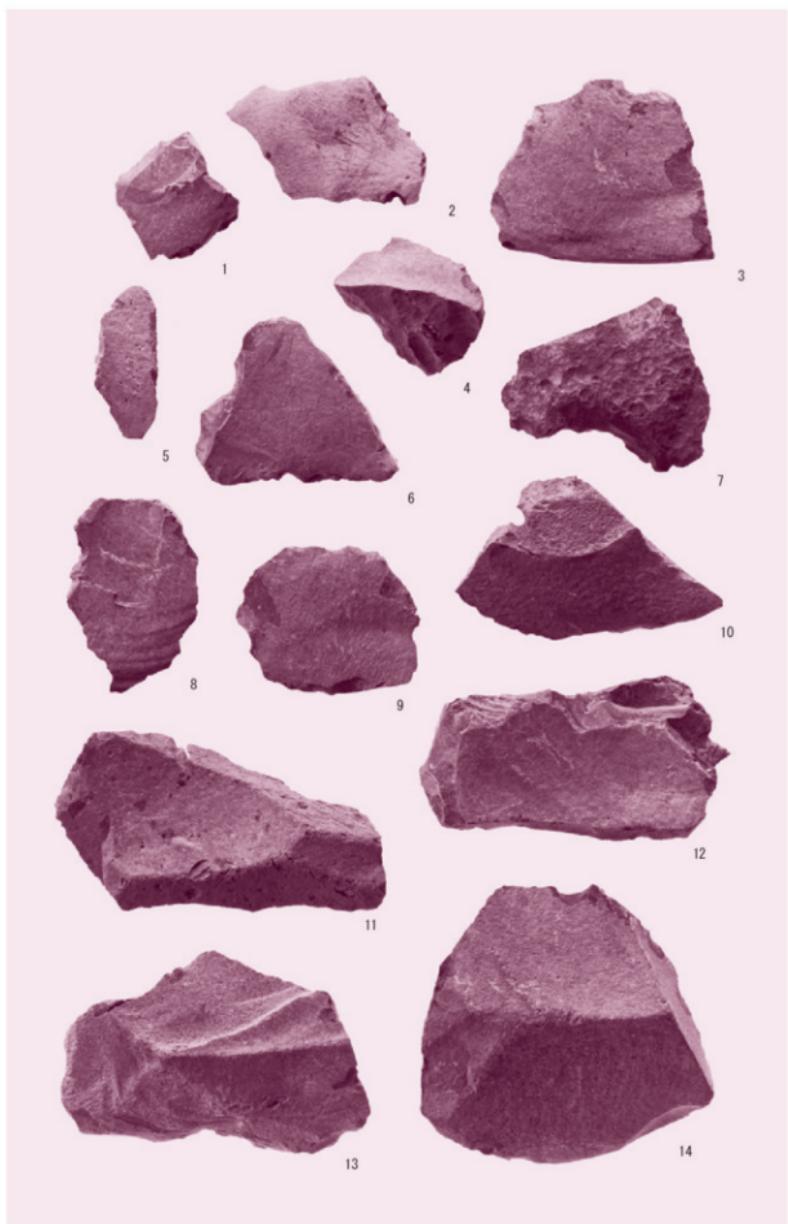
完掘状況



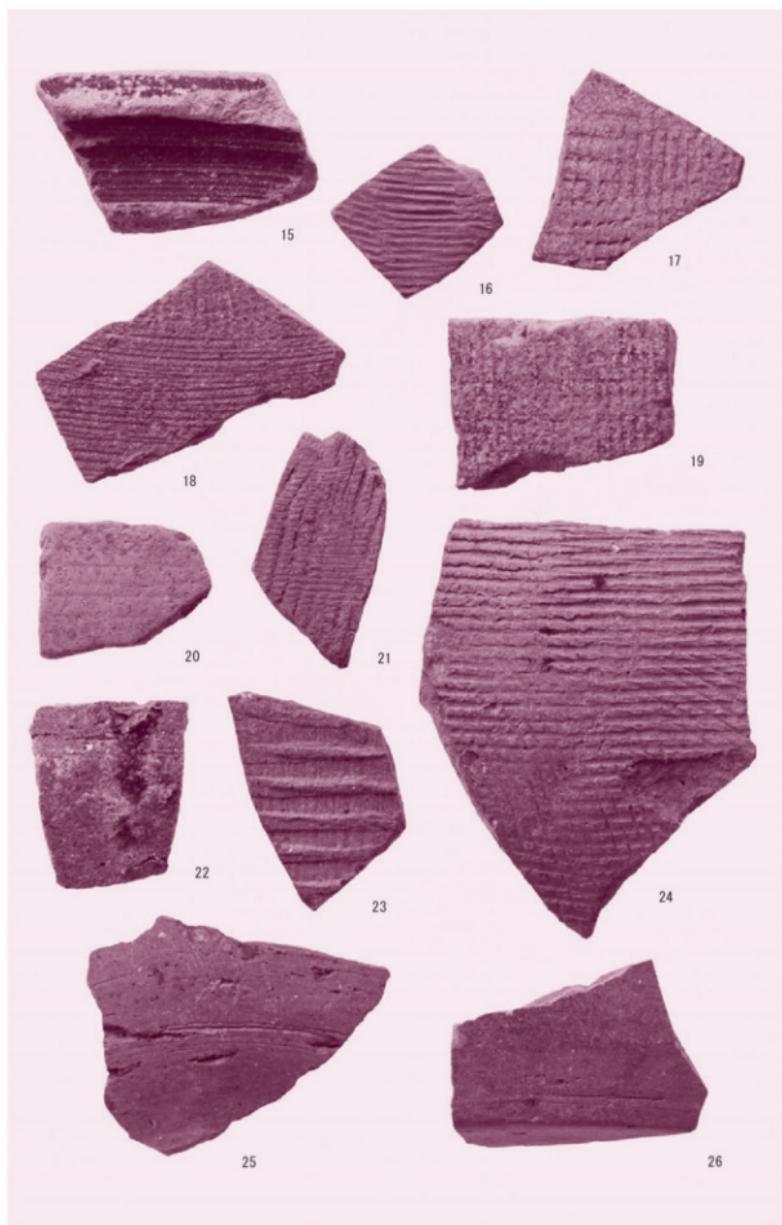
小学生



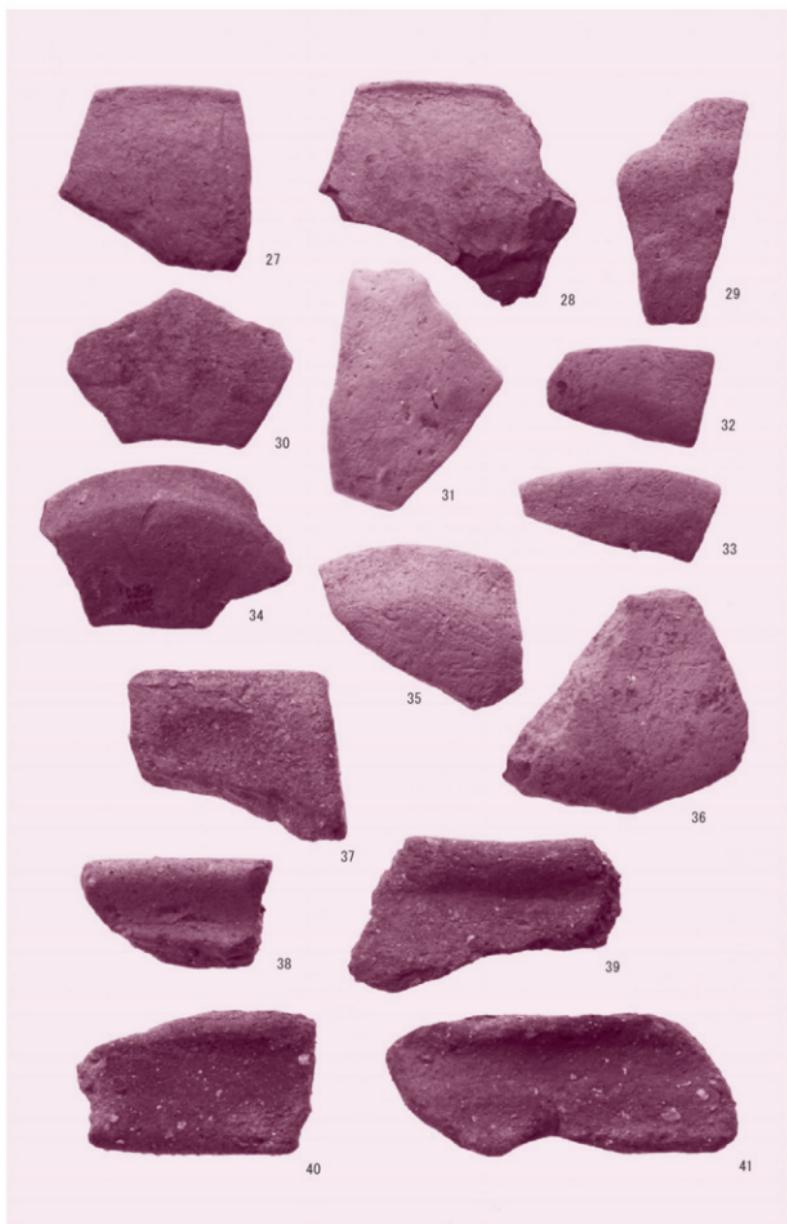
一般



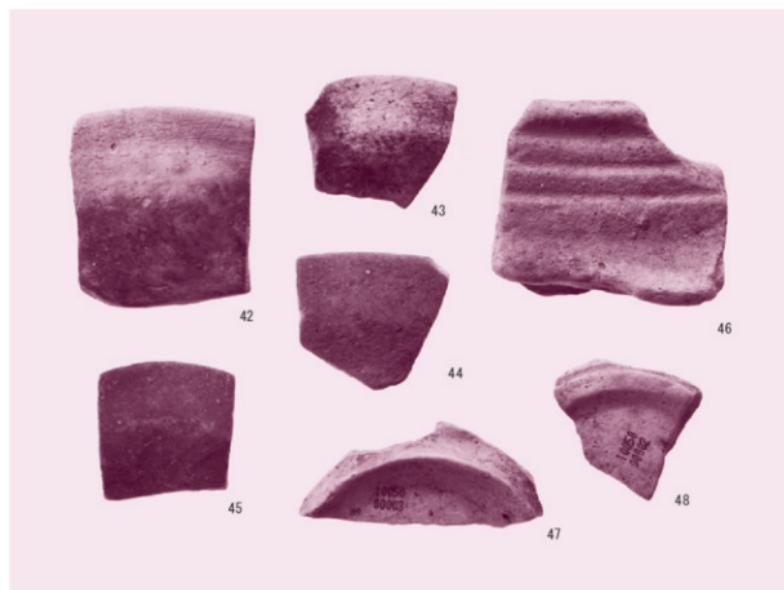
サヌカイト



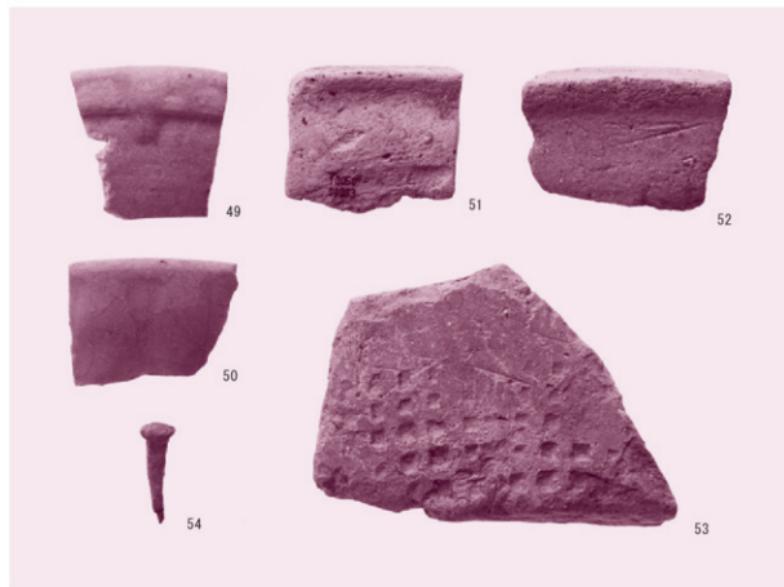
須惠器



土器



瓦器・瓦質土器



磁器・陶器・鐵製品

大阪府埋蔵文化財調査報告 2011-6

芹生谷遺跡 II

発行 大阪府教育委員会

〒 540-8571 大阪市中央区大手前二丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成24年3月30日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒 537-0002 大阪市東成区深江南二丁目六番八号

